

外国人が古い日本家屋をリノベーションして住むことを好む理由

—ハリー・ポッターは今、日本のガス会社で働いているのだろうか?—

パリッサ・ハギリアン

上智大学 国際教養学部国際教養学科 教授

1 古いものに対する欧州人の愛

先月、東京在住の日本人の友人夫婦からマンションを購入したと聞いた。彼女はとても興奮した様子で「引っ越しはものすごく楽で早いよ。服や私物を持っていくだけだから、1日で終わるわ」といった。「家具はどうするの?」と私が尋ねると「家具は持っていかなくて、全部新しく買うの。新鮮なスタートになるわよ!」と答えた。

これを聞いて私は非常に驚いた。ヨーロッパで引っ越しといえば、重たい家具をいくつも移動させることを意味する。たとえ新しく家具を購入するとしても、祖母の代から受け継いできた家具をどの家庭も持っているものだ。

私が思うに、ヨーロッパ人は過去や伝統といったものに特別な価値を置いている。ヨーロッパ人は「古いもの」に囲まれて育つ。故郷であるオーストリア南部の街グラーツで、私たち家族はたった築150年の建物に住んでいたが、中世の街ではほとんどの建物が築400年を超えており、何も特別なことではなかった。高校では年に何度もオペラを見に行かされ、遠足の度に古城を見学し、正直こういった古いものは退屈だと感じていた。だが、年を重ねるにつれ、伝統や古いものが持つ特色を愛でるようになった。それらには歴史と真の価値があるのだ。

2 古く美しい日本の家屋

多くのヨーロッパ人が私と同様の経験をしているため、古い建物に住みたいと思うのも、また、日本の古い家屋を非常に美しいと考えるのも不思議ではない。私は30年前に初めて東京に住んだ時のことを今でも覚えている。その寮は大変古く、

私の部屋は4.5畳で、典型的な日本(!)という感じであった。

また、多くの日本人がそのような美しい部屋よりも、モダンなマンションに住みたがることに驚いたことも覚えている。当時、日本人はモダンであることをとても好むのだと思ったが、木造の家に2年住んでから本当の理由がよく分かった。それは、モダンなマンションには断熱性や床暖房が備わっているからであった。

それでもやはり、日本で家を持つことは私の夢だった。10年前にマンションを探していた時、不動産会社の物件リストで後に購入することになる家と出会った。60年代に建てられた古い日本の木造家屋で、私は一目で気に入った。とても雰囲気がよく、どの部屋も明るくて日当たりもよい。以来、私はこの家で素晴らしい時間を過ごしている。

この体験を実に気に入ったため、私は日本の古い家屋をリノベーションし、賃貸に出すビジネスをスタートさせた。幸運なことにポーランド人の友人が東京で小さなリノベーション会社を経営しており、彼がすべてのリノベーションを担当してくれている。2018年以来、4件のリノベーションプロジェクトを完了させ、多くの学びを得た。このプロジェクトが非常に楽しく、ビジネスをさらに拡大させていこうと考えている。

3 日本家屋の持つ魅力

では、なぜ外国人は日本の木造家屋のリノベーションを好むのだろうか?

第一に、どんな形式であっても、日本のスタイルはシンプルに素晴らしいと外国人は感じていることである。日本のスタイルほど異彩を放つデザ

インや建築様式はほかにはない。日本や日本のものがどれほど国外で人気を博しているか、多くの日本人が分かっていない。特に、木造の家は温かみや故郷のような感覚、居心地のよさ、伝統を感じさせてくれる。

それに加え、ヨーロッパ人は特に、家との関係を非常に特別に思っている。日本では家とは専ら商品のような扱いであり、そこに住み、古くなったら新しい家を手に入れる。日本には、居住者を数ヶ月間別の宿泊施設に滞在させ、新しい家を建ててから、同じ場所の新しい家に住むように手配する会社もある。

ヨーロッパでは家を建てること、特に一戸建て住宅を建てることは、多くの者にとって一生のプロジェクトだ。20年間貯金するだけでなく、プロジェクトのプランニングにも数年を費やす。家は自分自身のパーソナリティやスタイルを反映している必要があるのだ。また、多くの人が建設現場で積極的に働きもする。人文学者でもあった私のラテン語の先生は、週末になると新しい家の建設のためにレンガを運び、私たち生徒もよく手伝った。家が完成したら、残りの人生をそこで過ごすという考えだ。

ヨーロッパでは、建設だけでなくリノベーションも、非常に複雑であるにもかかわらず、趣味として大変人気がある。特に、古い建造物に関しては、何が変更できて、何が変更できないのか、多くの規制があり、変更には許可が必要になることが多い。私は京都で購入したい家があったが、家の前に大きな木があり、それを切らなければならなかった。そのため、私はその家の購入をやめようと思った。オーストリアの街では、それがたとえ自宅の庭であっても、市の許可なしに木を切ることは許されていない。許可を取るには最長で2年かかることもあり、手続きは大変複雑だ。結局、許可が下りないこともしばしばある。

私の懸念を伝えると、不動産業者は「明日その

木を切りましょう」といい、実際そのとおりになった。当時の所有者が作業員を呼んで2分で木がなくなり、私はその家を購入することができた。これがオーストリアの庭の木であったなら、何年もの労力とストレスがかかり、ほかの家を買うことになっていただろう。

4 信頼のおけるサービスプロバイダー

日本でのリノベーションがはるかに容易であるもう一つの要因は、配送業から公共の水道やガス業者に至るまで、素晴らしいサービスを受けられる点にある。また、製品が時間どおりに損傷なく届くことも挙げられる。この信頼性のおかげで、リノベーション計画も非常に立てやすい。

さらに、日本のサービスはその迅速さも目を見張るものがある。数年前の夏、東京の我が家にある40年前の古いガス管からガス漏れが発生した。ガス業者による年次点検の際に見つかり、その業者の説明では、古いパイプを完全に交換するために、私の家の裏にある道路を掘り起こす必要があるとのことだった。

私は非常にショックだった。というのも、オーストリアで同様の問題が発生すると、安全上の理由から、まず完全にガスが止められる。その後、ガス会社が作業員を手配して工事が開始されるまでに、数ヶ月待たなければならない。最悪の場合、数ヶ月間温水が出ず、暖房も使えず、料理もできない。正に悪夢である。

もちろん日本においてもガス漏れは深刻な問題だが、その対応はかなり違った。

「ガス漏れはいつ直りますか？」冬が来るまでには修理されることを願いつつ、私は尋ねた。するとガス業者は「30分以内には。すぐに修理チームを呼びますね」といったのだ。

——え、？ きっと冗談に違いない。それとも、私が彼の日本語を正しく理解できていないのか。まさか、30分以内に来られるわけがないだろう。

しかし、彼らは本当にやってきた。電話からちょ

うど25分後に、7人(!)のガス会社の作業員が到着し、道路を掘り起こし始めた。これは私がこれまでで最も驚いた出来事であり、本当に信じられない思いだった。

なぜこんなことが可能なのか？ 魔法だろうか？ ハリー・ポッターが転職して日本のガス会社で働いているのだろうか？ 信じられなかった。ガス会社の迅速な対応にいたく感動した私は、日本の経営に関する上智大学での自身の講義で、日本の素晴らしいサービス品質の例として、今もなおこの体験を伝えている。

迅速だけでなく、彼らの職業倫理もまた素晴らしい。たとえそれが、東京の真夏の炎天下で道路やパイプの修理をしなければならない場合であっても、である。もしこれがオーストリアなら、私は作業者を気遣って、コーヒーや水、サンドイッチ等を差し入れなければならないし、作業後には持ち帰れるようビールを渡すのが最善である。

多くの場合、日本のサービスプロバイダーは迅速だけでなく、非常に親切でもある。ある時、リノベーション開始前の家屋の水道管点検に立ち会うため、京都まで日帰りで出向いた。京都水道局の作業員が水漏れを見つけたが、私が東京へ出発するまでの間に、彼らは数時間ですべての作業を完了させた。

帰路の新幹線の車中、京都水道局の男性から電話を受けた。大変親切なことに、その晩にすぐに水道を使えるようにすると申し出てくれた。私がその日東京から来たと聞いた彼は、私が疲れているかもしれないと考え、「今晚お風呂に入れるよう、すぐに水道管を開けられますから、お知らせ下さい」と連絡をくれたのだ。その心遣いに私は本当に感動した。

オーストリアでは、このような経験をすることは決してない。それどころか、20歳になる私の姪が昨年12月、ウィーンの新しいアパートメントにキッチンの取り付けをオーダーした時は、キッ

ンが届くまでに3ヵ月を要した上に、到着するとコンロが壊れており使用できなかった。その会社に別のコンロを注文しなくてはならなくなり、さらに2ヵ月がかかった。20回ほど電話で苦情を申し入れたが、業者が謝罪することはなく、できることは何もないといわれるだけであった。

ヨーロッパではこのような出来事は普通のこと、リノベーションや建築プロジェクトを悪夢に変えてしまう。注文したものの半分以上が届かないか、壊れており、業者に電話をして解決しようとするれば数日、多くの場合は数ヵ月かかるのが常だ。オーストリアではリノベーションや家の建設が離婚原因となることが非常に多いが、それも不思議ではない。比較すると、日本でのリノベーションはまるでパケーションのようである。

5 日本家屋に住むという体験

もちろん、日本家屋に住むこと自体にも特別な魅力がある。特に畳の部屋は格別の体験である。

ヨーロッパではそれぞれの部屋に特定の目的があるが、畳部屋は様々な使い方ができる多機能な部屋だ。オーストリアで大きな建築会社を経営している兄が初めて私の家の畳部屋を見た時、この部屋は何のための部屋なのかと、とても驚いていた。不思議そうに「ほとんど何もないじゃないか」というので、「ここはあらゆることのできる部屋。食事をしたり、眠ったり、遊んだり、仕事をしたり、何でもできる」と私は答えた。これは大変優れた特別なコンセプトであり、我々にとっては非常にめずらしいものだ。

隣の家を外国人が買いリフォームしたらどうだろうか。確かに驚きはするが、たいていは肯定的である。何年もずっと空き家だった物件だからだろうか。外国人がリフォームしている家に、近所の方々は興味津々である。建築業者を使わずに、自らリフォーム作業をしている様子に驚いている。とりわけご年配のご近所さんは時間がたっぷりあるのか、よくおしゃべりにやってくる。

ご近所さんだけが、このリフォーム作業に興味があるわけではない。ヨーロッパの大手家具会社に、キッチンのパーツをトラックで持ってきてもらったときのことである。配達員に建築作業員はどこかか尋ねられた私のポーランド人の友人は「いませんよ。自分たちですべてやります」と答えた。配達員は驚いていた。

ヨーロッパでは、キッチンの設置だけではなく、自分たちで壁を塗ったり、タイルを貼ったりすることはごく普通のことである。DIYが生活の一部になっている。今までもそうであるし、これからもそうだろう。DIY

は安くすむだけではなく、サスティナブルでもあるのだ。

6 課題

もちろん、日本家屋に住むことにも課題はある。一つは、家の内外の気温が同じであることである。20代の頃はさほど気にならなかったが、年を重ねるにつれ、ヨーロッパのセントラルヒーティングを恋しく感じる。

それに加え、遮音性も乏しい。隣人の行動がほとんど聞こえてしまう。もちろん、木造家屋に住むことの危険性もある。日本は地震の多い国であり、すべての古い家屋が耐震構造になっているわ



写真1 キッチン・リビングのリノベーションのビフォーアフター(2019)



写真2 リビングのリノベーションのビフォーアフター(2023)

けではない。火災のリスクも常にあるため、屋内でのろうそく等の使用は避けるのが賢明だ。

7 結論

しかしながら、日本の古い家屋の魅力は、そういった問題も上回るといえるだろう。伝統的な木造家屋に住む経験は、時には寒さに震えることがあろうとも、心温まるものである。

最近では、昔ながらの日本家屋をリノベーションして住むことに興味を示す人が日本の若者の間で増えており、嬉しく思っている。彼らは古い日本家屋が持つ伝統と歴史を知り、その価値を称えているのである。